

第3章 高齢化集落における集落機能の実態等に関する調査

I. 高齢化集落における集落機能の実態等に関する調査概要

(1) 基本方針

- 限界集落対策を検討するにあたり庁内組織として「限界集落対策検討会」を置く。
- 市民の意識、実態の把握、現況の分析等を目的とし、限界化が進む集落における調査を実施する。
- 平成19年度限界集落対策調査の名称を「高齢化集落における集落機能の実態等に関する調査」とする。
- 調査については、宇都宮大学農学部守友教授の指導のもとに実施する。
- 集落の傾向を把握するため、特定の調査区域を設定し訪問調査を基本に実施する。
- 自治会の協力を得ながらワークショップを行い集落の実態や問題点等を抽出する。
- 報告書の概要については、国勢調査等基礎的数値データの整理、高齢化集落の現況把握、訪問調査の結果の分析、今後の方向性の検討とする。

(2) 戸別訪問調査対象地区

- 戸別訪問調査対象地区については、主に山間地域で高齢化率が高く(45%以上)、集落内の人口が少なく(100人未満)、地域の中心から距離がある集落(総合支所から約2.5km以上)を対象とするため、藤原地域の三依地区で横川・独鈷沢の2自治会、足尾地域で餅が瀬・唐風呂・切幹・南橋の4自治会、栗山地域で土呂部自治会の計7自治会とする。
- 戸別訪問調査の前段で自治会にヒアリング調査を実施する。

(3) 戸別訪問調査の概要

- 地区概要把握のため自治会へのヒアリング調査を実施。
- 調査日程を定め調査周知用文書を予め作成し、自治会で配布してもらい、住民に周知する。
- 職員が各世帯を訪問し調査を行う。

(4) 三依地区に関する調査

- 三依地区については、戸別訪問調査対象以外の上三依・中三依・芹沢・五十里の4自治会にも範囲を拡大し、モデルケースとしてヒアリング調査を実施する。

(5) ワークショップの概要

- 足尾地域・栗山地域・三依地区の計3地区の自治会に依頼し、それぞれ10人程度の参加者でワークショップを開催。
- 生活の中で困難なこと、重荷になっていることといった課題や、地域の良さ、特徴的な文化等を輪になって話し合ってもらう。
- それぞれ感じたことをメモに記載し、KJ法により模造紙に取りまとめる。

(6) 高齢化集落を考える講演会の開催

- 高齢化集落が集中している足尾地域・三依地区において実施。
- 全体を監修している宇都宮大学農学部守友教授に依頼し、調査結果を基に、高齢化集落の問題・誇れる地域になるための手段等についての講演会を開催。

II. 自治会ヒアリング結果について

(1) 調査概要

- 調査対象地区については、主に山間地域で高齢化率が高く（45％以上）、集落内の人口が少なく（100 人未満）、地域の中心から距離がある集落（総合支所から約 2.5km 以上）を対象とするため、足尾地域 4 自治会、栗山地域 1 自治会、三依地区 2 自治会を調査する。
- 三依地区については、戸別訪問調査対象以外の上三依・中三依・芹沢・五十里の 4 自治会にも範囲を拡大し、モデルケースとしてヒアリング調査を実施する。
- 自治会の方数名に公民館等に集まってもらい、ヒアリング形式で行う。

(2) 調査期間

平成 19 年 6 月 26 日～7 月 10 日（4 日間）

(3) 調査結果概要

① 集落の現況について

集落の世帯や人口が著しく減少した理由は、働く場がない、進学の問題、子供の数の減少、就業構造の変化等を原因として考えている。現在、後継者のいる世帯は非常に少ない。後継者の考え方については、働く場の不足といった問題から戻って来られないという客観的な感想、また戻ってきてほしいが現在の状況を考えると無理に戻って来いとはいえないといった主観的意見が出された。その他、主な生業は年金が多い。

② 高齢者の生活状況について

元気な高齢者が多い集落と消極的な活動しかできない集落があり、集落ごとに差がある。主に日常生活において不安に感じていることは、冬の積雪による不安、バスなどの交通の便が悪い、病院や診療所などの利用が不便、集落や近所に住む人が少なくなり活気がない、道路の状況が悪い等があげられた。

地域における高齢者宅の見守り活動は、何らかの形で行われており、地域のつながりは強い。

③ 各世帯の移動等の手段

各世帯の移動等の手段は、自家用車での移動がほとんどである。公共交通機関の利用は集落によって異なるが、総じて利用は少なく、主な理由としては、バス・電車の本数、駅・バス停までの距離に不満があるとされた。

④ 日常生活について

買い物等については、「週末に市街地で買い物をする」がほとんどである。しかしながら、独居世帯は、近所の方、親戚、宅配便等を頼りにしている。通院について困っていることは、移動手段がほとんどである。

⑤ 冬（雪）の対策

雪下ろし等については、現在のところあまり困っておらず、道路等除雪についても不満を持っていない。

⑥ 農地や林地について

農地・林地の有無については、集落により異なっている。管理主体は、個人がほとんどである。耕作放棄などによる荒廃農地が拡大しており、その主な原因に野生鳥獣の被害がある。この被害により、耕作意欲も低下している。一部に休耕地等を貸す意思はあるものの、野生鳥獣の被害により借り手がいないのではといった意見が多かった。

⑦ 防災対策

防災についての不安はないとの回答が半分以上であるが、一部、地震や訪問販売等について不安がある。

⑧ 集落の寄り合い（常会）

集落の寄り合いの回数は、全ての自治会で年2回以上行われており、共同作業、お祭り、集落内の美化活動等について話し合っている。

⑨ 集落で行う共同作業

集落で行う共同作業は、美化活動やお宮などの維持管理が行われており、一部を除いては、現在のところ人手不足等でできなくなったことはない。しかしながら、今後高齢化に伴い、集落の共同作業ができなくなる不安を持っている。

⑩ 住民同士の相互扶助活動

相互扶助活動（冠婚葬祭）については、地域の中で行われており、現在のところ不満はないという回答が多かった。しかし、徐々に人手不足や高齢化などで困難な状況になってきている。現在も委託や簡素化により工夫をしているが、将来には漠然とした不安がある。

⑪ 集落における子供の問題

子供がいない集落がほとんどである。また、学校の統廃合の問題について関心を寄せている。

⑫ その他集落の維持等

集落のよいところは、「自然」が圧倒的であり、続いて「景観」、そして「気候」となっている。そのほか、「人柄」や「水」といった自慢もある。地域で守りたいものは、「自然」、「伝統文化」、「景観」である。後継者不足等でできなくなった伝統行事もある。また、他地域との交流については多くの自治会で行っており、スポーツ大会、交流会、行事等を共同で行っている。一方、都市部からの新規定住者受け入れについては、自治会ごとに意見が違い、共通的な傾向はみられなかった。今後の集落の維持の見通しは、集落の統合といった意見も多かったが、統合は、困難だと認識している集落もある。集落に関する不満は概ね少なく、今後とも集落に住み続けたい意向が強い。

Ⅲ. 戸別訪問調査結果について

(1) 調査概要

- 戸別訪問調査対象地区については、主に山間地域で高齢化率が高く(45%以上)、集落内の人口が少なく(100人未満)、地域の中心から距離がある集落(総合支所から約2.5km以上)を対象とするため、藤原地域の三依地区で横川・独鈷沢の2自治会、足尾地域で餅が瀬・唐風呂・切幹・南橋の4自治会、栗山地域で土呂部自治会の計7自治会において、戸別訪問調査をする。
- 平成19年7月24日～8月10日(11日間)
- 調査個数121戸(対象戸数134戸)実施率90.3%
- 職員合計33人・延べ83人で実施。
- 基本的に戸別に訪問してヒアリング形式で調査。

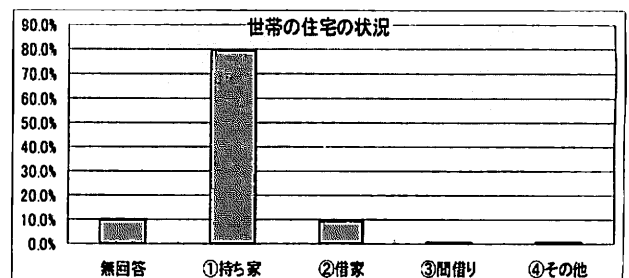
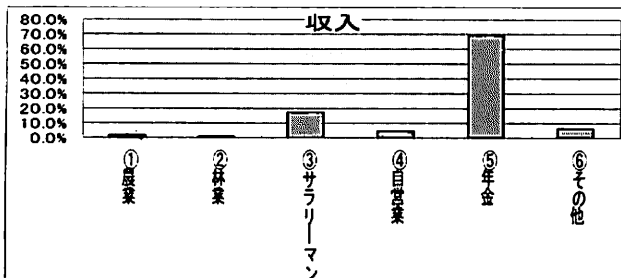
(2) 調査結果

- ここでは全体としての傾向を表す。地域別調査結果詳細は69頁を参照。

(3) 調査結果概要

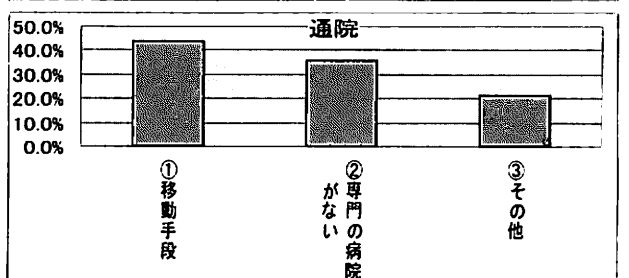
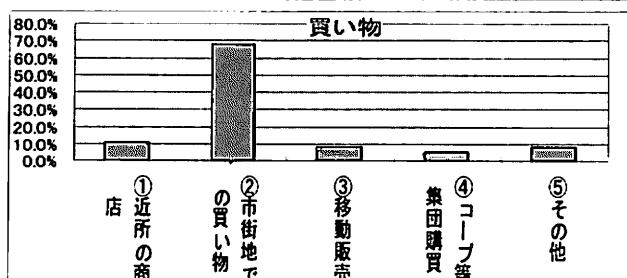
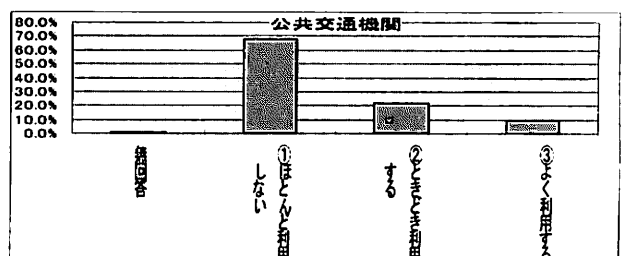
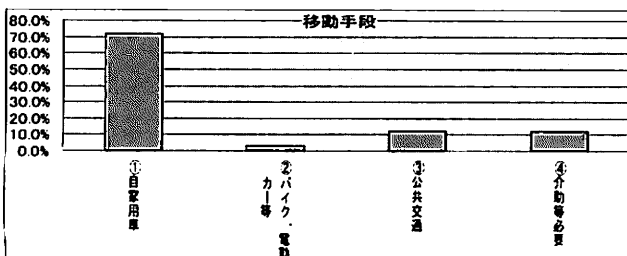
① 仕事と住居について

- ・ 主な収入は、約70%が年金であり、住宅は、約80%が持ち家である。



② 生活状況等について

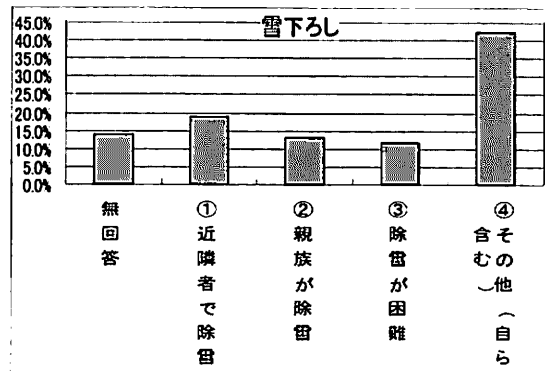
- ・ 日常生活での移動手段は、約70%が自家用車であり、公共交通機関は、約70%がほとんど利用していない。
- ・ 買い物は、週末等市街地でまとめ買いする世帯が約70%であり、通院にあたり困っていることは、移動手段が約40%を占めている。



第3章 高齢化集落における集落機能の実態等に関する調査
Ⅲ. 戸別訪問調査結果について

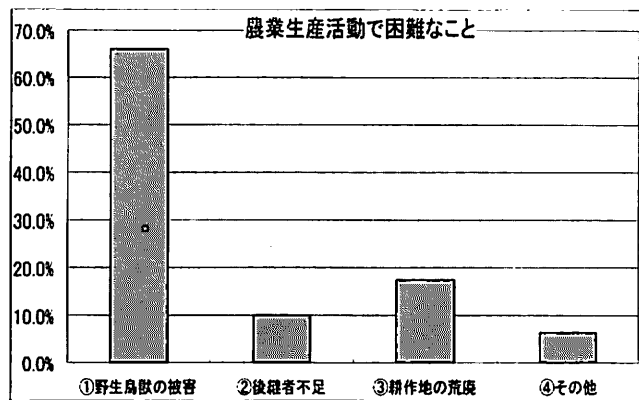
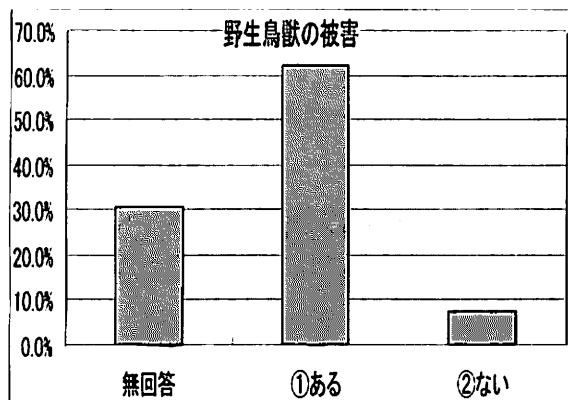
③ 冬（雪）の対策について

- ・ 雪おろし等については、非常に困っているが約 10%であり、その他の自分で行っているが約 40%となっている。



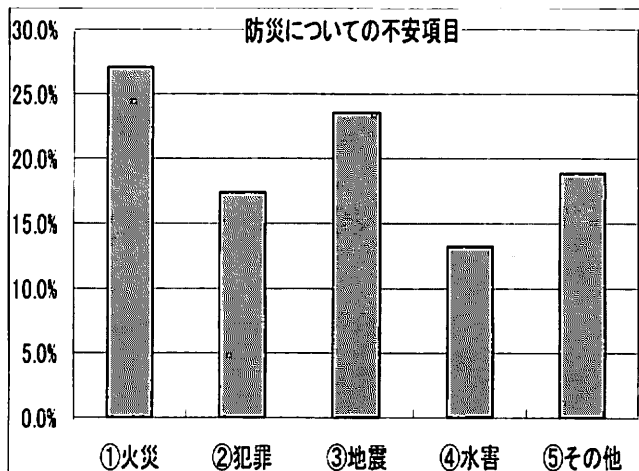
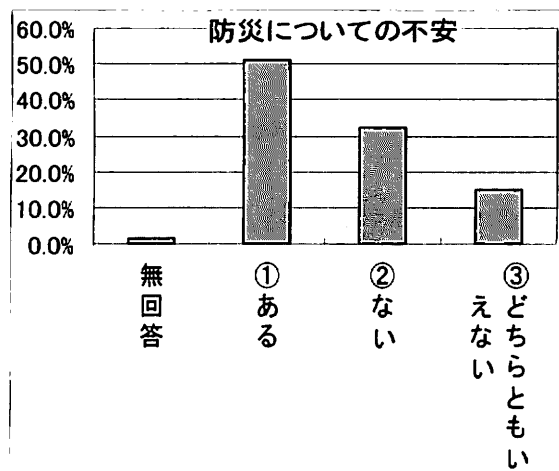
④ 農地等について

- ・ 耕作地等の野生鳥獣の被害があるとの回答は約 60%であり、さらに、農業生産活動を続けるうえで困っていることの約 65%が野生鳥獣の被害に集中している。ヒアリングからは、野生鳥獣の被害が数多く訴えられており、集落内の生きがい喪失の大きな要因となっている。



⑤ 防災対策について

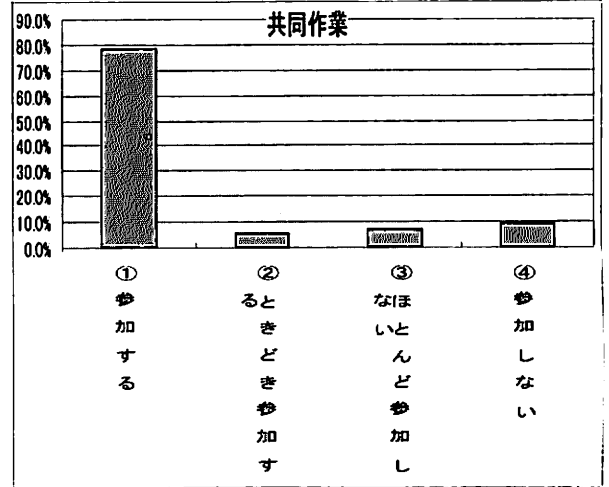
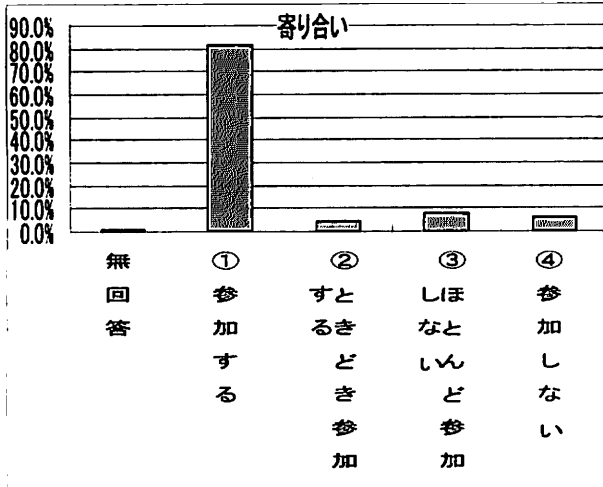
- ・ 防災について約 50%の方が不安であり、その項目は火災・地震・犯罪の順に不安が高い。



⑥ 集落の寄り合い（常会等）について、及び ⑦ 集落で行う共同作業について

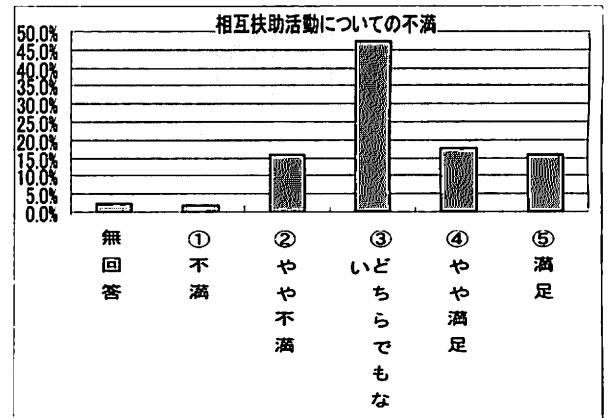
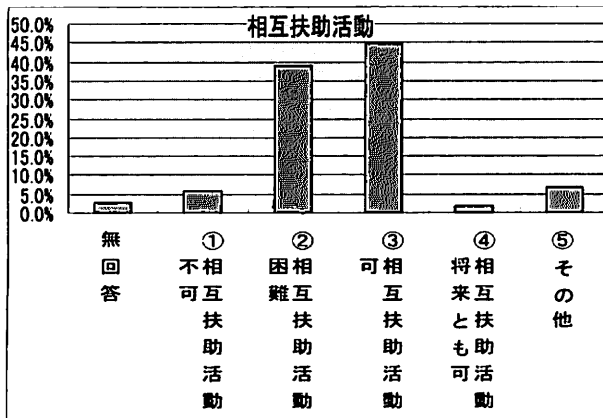
- ・ 集落の寄り合い（常会等）については約 80%が参加している。
- ・ 集落で行う共同作業についても約 80%が参加している。

第3章 高齢化集落における集落機能の実態等に関する調査
Ⅲ. 戸別訪問調査結果について



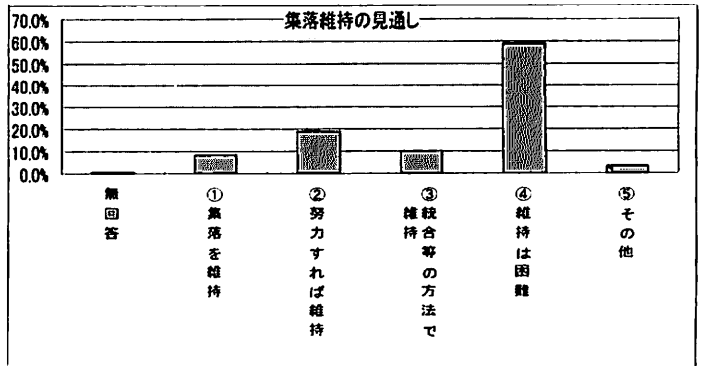
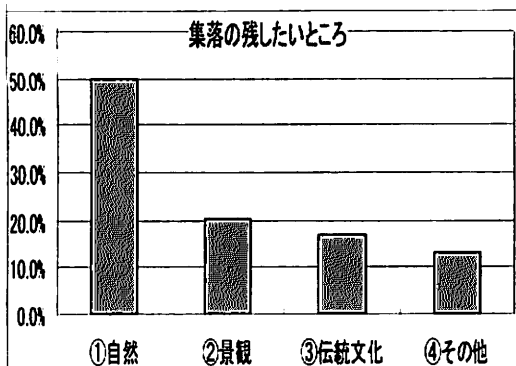
⑧ 住民同士の相互扶助活動について

- ・ 相互扶助活動は地域の中で行われているという回答が約 45%と一番高いが、人手不足・高齢化で困難な状況になっているも約 40%となっており、今後の相互扶助活動に不安があると認識している傾向にある。
- ・ 相互扶助活動への不満の度合いは、不満・やや不満を合わせ約 17%であり、現在のところ相互扶助活動への不満はあまりない。

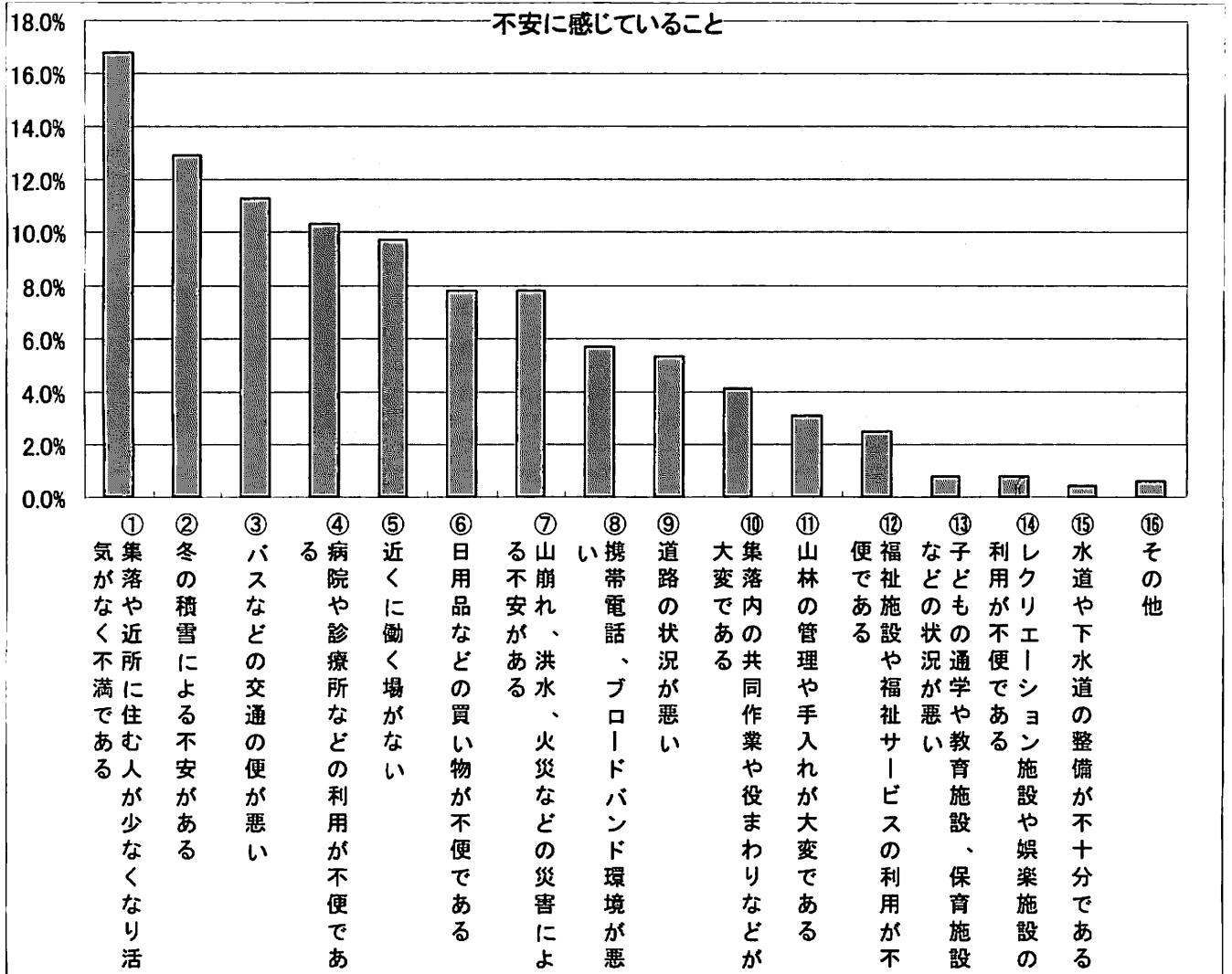


⑨ 集落の維持等について

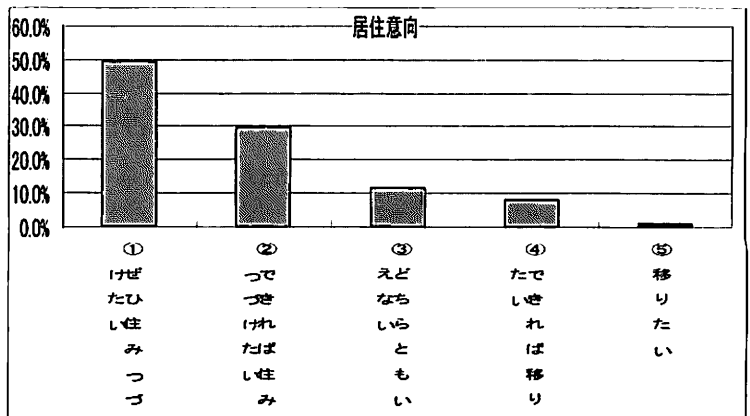
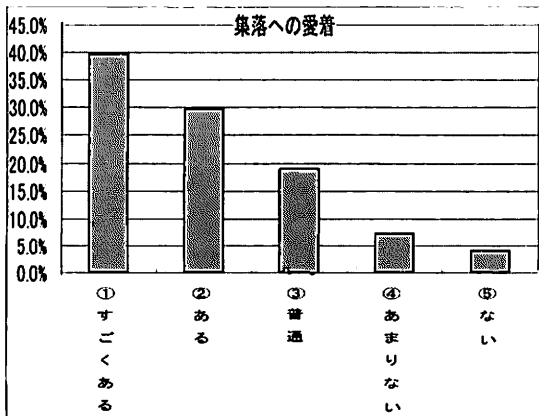
- ・ 集落で残したいものは、自然が 50%、景観が約 20%、伝統文化が約 15%となっている。
- ・ 今後の集落の見通しについては、約 60%の方が集落の維持が困難であると認識している。



- ・ 不安に感じていることについては、活気がない、積雪、交通の便が悪い、病院や診療所などが不便、働く場、買い物等の順となっている。

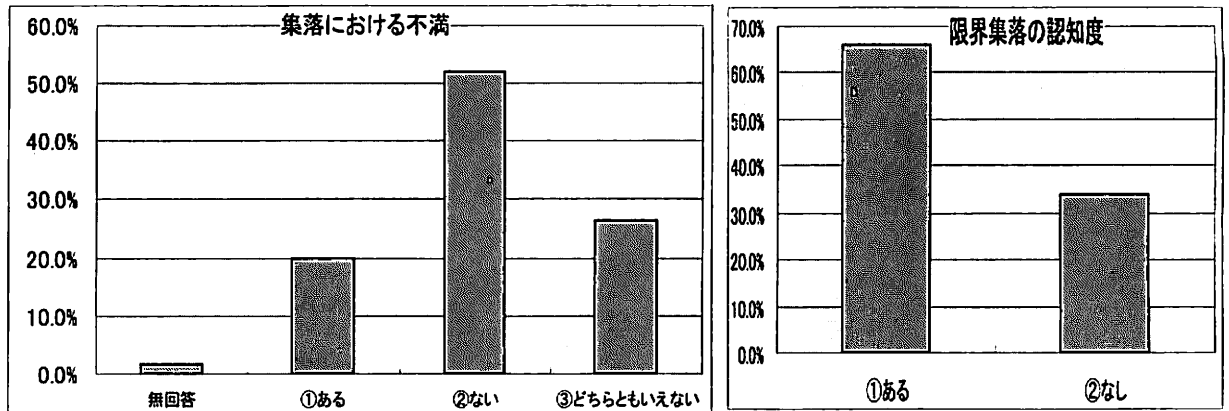


- ・ 集落への愛着については、ある・すごくあるを含め約 70%の方が愛着を持っている。
- ・ 今後の居留意向についても、できれば・是非住み続けたい方が約 80%であり、当該地域に住み続けたい意向の方が圧倒的に多い。



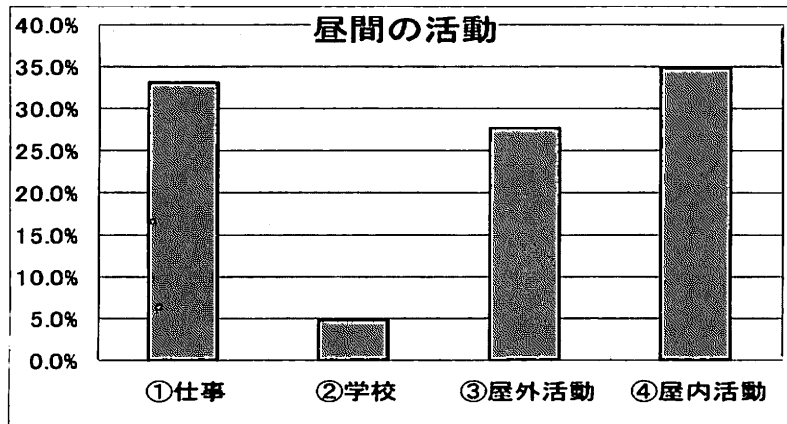
第3章 高齢化集落における集落機能の衰退等に関する調査
Ⅲ. 戸別訪問調査結果について

- ・ 集落への不満については、約 20%があると答え、どちらともいえないも含め約 80%が不満を持っていないと回答している。
- ・ 限界集落の用語の認知度については、約 65%が知っている。しかしながら、地域によって差があり、栗山地域の認知度は低く、足尾地域・三依地区の認知度は比較的高い。

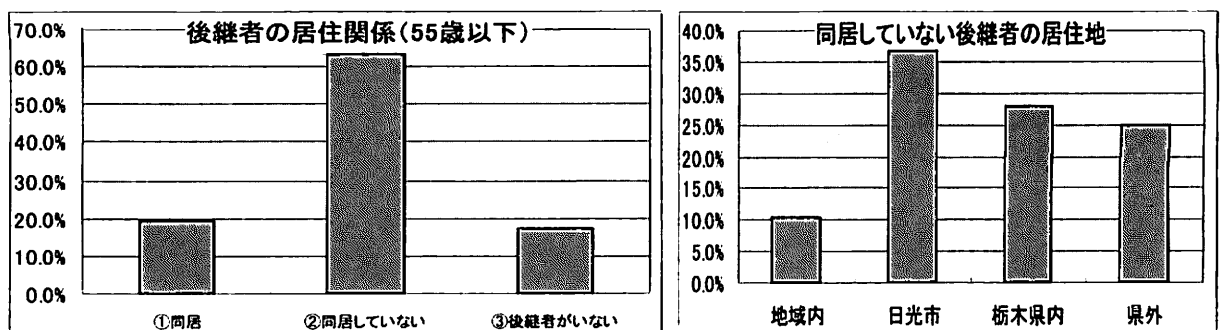


⑩ 集落の活動状況・後継者について

- ・ 昼間の活動は、屋内活動・仕事がそれぞれ約 35%となっている。栗山地域の屋外活動は比較的多く、足尾地域の割合が少ない傾向にある。具体的な活動の内容は、畑・土いじり、勤務、家事の順になっている。

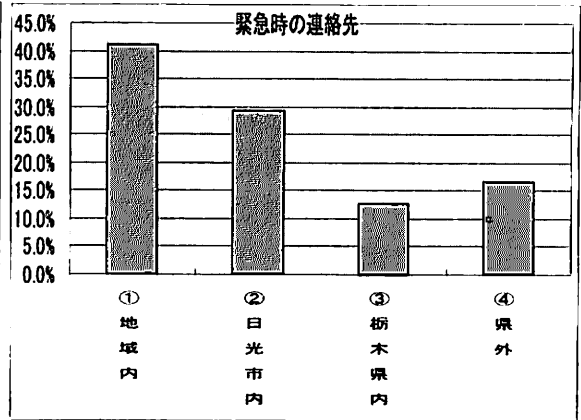
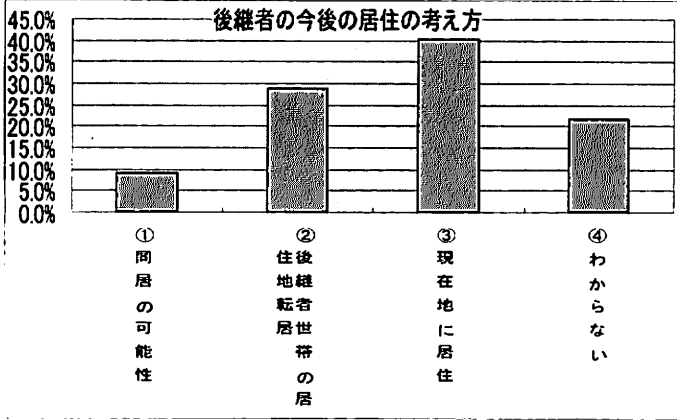


- ・ 55 歳以下の後継者の有無と同居の有無の関係は、後継者がおり、かつ同居しているのは約 20%、後継者がいるが同居していない方は約 60%、後継者がいない方は約 15%となっている。
- ・ 同居していない後継者の居住地は、地域内、日光市を含む県内が約 75%であり、比較的近い範囲に後継者が居住している。



第3章 高齢化集落における集落機能の発揮等に関する調査
Ⅲ. 戸別訪問調査結果について

- ・ 今後の後継者との同居等の考え方については、約40%が同居はせずとも、このまま現在地に住み続けたいが一番多く、将来は後継者の世帯の居住地へ転居又はその可能性がある方は約30%である。今後、後継者が同居（帰郷）する又はその可能性がある方は約10%であった。
- ・ 緊急の連絡先については、約70%が日光市内となっている。



IV. 自治会・戸別訪問調査分析

(1) 自治会・戸別訪問調査結果概要

まず、生活関連について、居住者の主な収入は、年金。住宅は、足尾地域の一部を除いて、持ち家。後継者は転出しているが、緊急連絡できる親族は地域内にいる。そして、本人はこのまま現在地に住みたいという意向が非常に強い。

次に、地域における問題点は、全体的な不安要因として、人が少なく活気がない、積雪、交通の便、病院・診療所、近くに働く場がない、買い物が不便、災害の不安、携帯電話の環境が悪い、道路が悪いなどがあげられている。

この中で交通面の特徴では、公共交通機関の利用率が低い。これは「世帯員の中に自家用車を使える人がいる」ためだが、将来、運転できなくなることを考えると不安という声が多い。5年・10年先の交通手段をどうするべきか考えておく必要がある。

次に、野生鳥獣の被害は深刻で、耕作放棄につながっているところも多い。また、火災、地震、犯罪など防災についての不安が大きく、5割の人が何らかの不安がある。

自治会などの共同作業や相互扶助活動については、昔から各世帯が参加する中で、地域全体として行われている。雪も多いが、近所、親戚で助け合って除雪しているために現在はそれほど困っていない。しかし、高齢化などで困難な状況になりつつある、という結果が出ている。

地域の守りたいものは何かとの設問では、自然、景観、伝統文化という回答が多かった。地域に愛着があり、住み続けたい。集落に対する不満もほとんどない。ただし、今後の集落維持の見通しに関しては、維持困難という考えが多い。つまり集落活動に少し衰えも見えるが、まだまだ活動できている。ただ、今後について、地域の方々も行政も共に考えていかなければならないという課題が出ている。

ただし、今回の調査結果の分析にあたり難しい点の一つに、当市の対象とされる高齢化集落が放射状に広がって存在することによって、その課題等において地域ごとの特徴があり、一様に捉えることができない点があげられた。また、自治会と戸別訪問調査をそれぞれに行ったことにより、自治会全体として捉えた場合の視点と、戸別の“個”による視点に相違点があったこと、さらに、選択型・意見型といった調査の設問形式の違いによって、回答結果に一部ズレが生じたことも否めなかった。

(2) 日光市の高齢化集落の位置づけ

図表 15 は、集落限界化の模式図である。一般的に集落の限界化については、世帯・人口の減少や高齢化の進行に伴って、いくつかのステージがある。

① 限界化初期

集落機能は一部脆弱化するが、全体としてはある程度維持できている。この時期には、水路清掃や農業機能が後退することが多い。

② 限界化中期（限界化の臨界点を超える時）

世帯数・人口が活動に必要な数を下回る時（臨界点を越える時）、集落機能全体の脆弱化が急激に進行する。この時期には、祭り、道路清掃、環境美化などの生活機能が後退することが多い。

③ 限界化末期

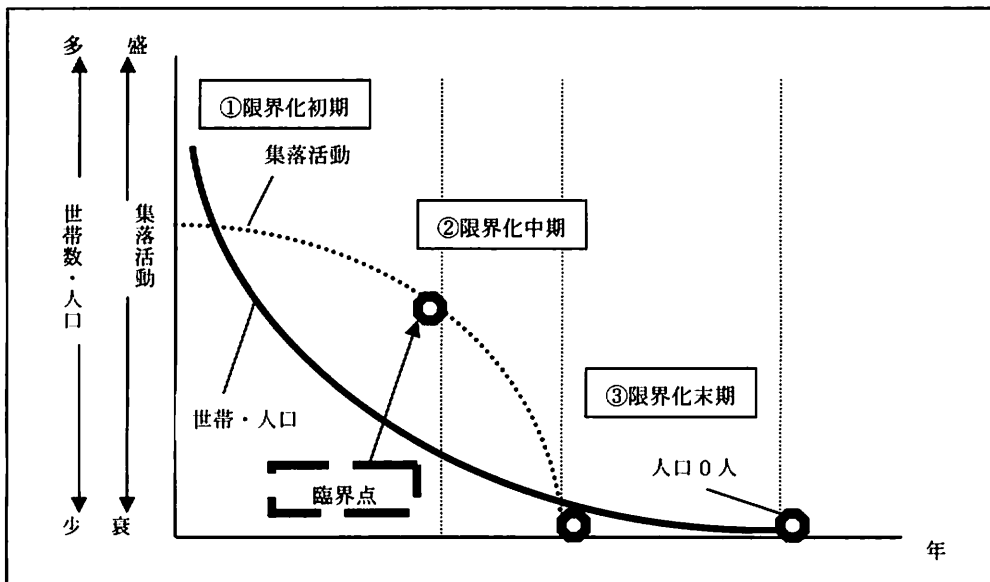
集落人口は数人程度となり、寄り合いなども開催されなくなる。人は住んでいるが、集落は、機能しなくなった状況。

日光市の高齢化集落は、今回の調査結果においては、一部山間地に点在している集落を除くと、限界化の初期の状況といえる。

市内全体の人口減少と少子高齢化の中であって、特に山間地における世帯数・人口の自然減をくい止めることは困難であるが、急激に集落機能が落ちない（臨界点を先送りできるよう）ように対策を講じる必要がある。

集落限界化の模式図

図表 15



（農村開発企画委員会「平成18年度限界集落における実態等に関する調査」平成19年3月作成）

（3）自治会・戸別訪問調査まとめ

① 地域力

調査員の感想の中で

- ・ 同居していない親族の手助けもかなりあるように感じた。
- ・ 医療面や福祉面では、子供や親戚などが連れて行ってくれている。
- ・ 健康で運転できる高齢者が多く、買い物や病院などが近所には無くても対応できている。
- ・ 一人暮らし世帯の安否確認など特段の決めごとはないが、日頃のあいさつや茶のみ話などで、互いに何となく気にかけていることで助け合いがなされている。

- ・ほとんどの人が市内または県内に家族がいるため、あまり不安を感じていない。
- ・昼間は畑仕事を行うなど、高齢になっても働く意欲がある人が多いと感じた。
＝高齢化集落は、公共交通機関、日常的な買い物、降雪等条件的に不利であるが、地域の力は残っている。

新たな施策を展開する場合、これらの地域の力を壊さず、育てていけるように考慮しなければならぬ。

② 集落の将来に対する不安

調査員の感想の中で

- ・『昔から住み続けているこの家が自分の居場所だ』との気持ちが強く、また、子供に迷惑をかけたくないという気持ちもあり、元気なうちは住み続けたいとの意見が多い。
- ・集落の高齢化については、若者や後継者が働く場所がないので、仕方が無いといった気持ちが強かった。
- ・行政に対する要望や集落に対する意見は総体的に少なかった。
- ・集落全体に対する意見の設問にも、高齢者になると自分の生活が精一杯との意見が多い。また、生活しているうえで高齢化集落といった認識があまりない。
- ・親元に（子供が集落に）戻ってくるのは、かわいそうという意識がある。
⇒ 一方において、共同作業・寄り合い等への参加意欲は旺盛であり、集落維持に対して、一概にあきらめているとばかりはいえない。

今後は集落の火を消さないために、あきらめない雰囲気づくりや生きがい探しの手助け、見守り続けるシステムづくりが求められてくる。

今回の調査そのものが、高齢化集落対策への足がかりとなれば良い。

③ 課題

全般的に、現在は、多くの方が車による移動が可能であり、近所付き合い等も市街地と比べれば濃密な関係が保持されている。また、自らが生まれ育った集落に愛着を持っており、地域の伝統文化を守ろうとしている。

しかしながら、市街地に比し交通・病院・買い物・通信等は不便であり、一般的に生活基盤の整備は遅れている。さらに高齢化の進行により、集落の維持については、将来的に困難といった状況にあり、個々のヒアリングの中では、一部にあきらめの気持ちも感じ取れた。

このような中であっても、誇りの空洞化は避けなければならない。

市民も行政も集落の状況を正しく共通認識する必要がある。その上で、悲観的にならず、集落が元気になるよう、集落のひとりひとりがエネルギーを持ち、今日を有意義に、明日を元気に過ごすために知恵を出し合える環境づくりが課題である。

V. ワークショップの結果について [※ファシリテーター：宇都宮大学農学部]

(1) ワークショップの手順

これまで検討してきたように、本調査ではまず高齢化集落におもむき、直接地域の方々からお話をうかがう、自治会ヒヤリングと戸別訪問調査を行った。

ここではそれらを基礎として、住民の主体的参加と、そこで皆で地域の将来を考えるという目的を持って行ったワークショップの経過と結果について述べておく。実施時期は平成19年（2007年）9月、場所は旧足尾町足尾南部地区、旧藤原町三依地区、旧栗山村土呂部地区の3カ所であった。

ワークショップは当該地区住民が中心となり、市職員が全体的設定を行い、宇都宮大学農学部農業経済学科教員・学生の参加、支援のもとで行った。当日参加者に配付したワークショップの手順を説明した資料が次に示すものである。

[※ファシリテーター：促進者という意味で、参加者の動きや状況を見ながら会議などを進行する人]

.....

地域の未来を皆さんで考えていきましょう

[今日これから行うこと]

☆ワークショップとはどのようなものでしょうか

1 仕事場、作業所

2 色々な人が自由に意見を出し合ってひとつのものをつくりあげていくこと

☆皆さんの暮らし、お仕事、地域の良いところ、改善した方が良い所などを皆さんで考えていきましょう

☆KJ法によって考えていきましょう

KJ法とはどのようなものでしょうか

川喜田二郎（かわきたじろう・Kawakita Jirou）頭文字KとJをとってつけたもの

☆今日はそれを地域に即して「コンニチワ集会」という形で考えていきましょう

地域の現状、暮らし、仕事、資源、文化、伝統、伝承などについて考えてみて下さい

ここでの約束・・・こんなことを書いていいかしらとか、恥ずかしいなどと思わない

他の人の意見をけなしてはいけない、なるほどそういう意見もあるのか
とほめあう、みんなの知恵・アイデアを活かしていく

①コン・・・あなたの生活（暮らし）の中で困難なこと、困っていることは何でしょうか

ニ・・・あなたの生活（暮らし）の中で重荷になっていることは何でしょうか

健康、福祉、交通、買い物、教育、仕事など気がつくことを何でも書き出しましょう

これを緑の紙にひとつずつ書き出してみましょう

②チ・・・それらの問題を解決する知恵や方法、地域の資源や文化はないでしょうか

第3章 高齢化集落における集落機能の実態等に関する調査
V. ワークショップの結果について

地域のまとまり、資源、文化（受け継がれている技術や技能、今も営まれている生活や習慣、むらのひとびとがつくる風景、むらのみんなでささえる行事）など地域の良いもの、誇りとなるもの、地域の宝となるものを何でも書き出しましょう

この知恵や方法、資源や文化があれば緑の紙にひとつずつ書き出してみましょう

③ワ・・・みんなでいっしょに輪になって考えるとどのようなことができるでしょうか

皆がいっしょになってできること、こんなことをやってみたいと思うことを緑の紙にひとつずつ書き出してみましょう

☆書いた緑の紙を、大きな模造紙の上に出して下さい

☆その紙切れを、似たもの同士あつめてください（カラーペンでまとめていってください）

だんだん大きなまとまりへとまとめていってください（カラーペンでまとめる）

まとまりができたなら、そこへ題名をつけていって下さい

☆ 全体の題名を考えて下さい。地域のこれから、未来を示すような題名を考えましょう

☆ 皆さんの地域の課題と今後の方向が見えてきたでしょうか

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（2）ワークショップの結果概要

以上のような手順で住民参加のもと、各地区の問題点・課題、良いところ・発展の芽などについて整理をしていった。なお、まとめた図の中のカードの部分につけられた赤丸●は、全体図ができあがったあと、張りだしてある緑のカードの中で、参加者が重要であると判断したものにはってもらった赤色のシールを表している（はじめに行った足尾地域では一人5枚、その後少し枚数が少ないと進行役・ファシリテーターが判断したため、三依地区、土呂部地区では参加者が一人10枚を持ち分としてはり付けていった）。

この現物は模造紙4枚をつなぎ合わせた大きなものなので、それを可能な限り忠実に、カードに書かれた文や絵、囲み線、つなぎ線などを、次に示す図（32～34頁）のようにパソコンで縮小して表現した（なおその際それぞれのカードは緑色ではなく白色であらわしてある）。これをもとにワークショップの結果にあらわれた住民の意向を検討していこう。

足尾地域（9月13日）P32

ここでの参加者は10名で、比較的高齢の男性が多く、女性の参加者は1名のみであった。

まず図の右側に集められたのは、「困難」、「重荷」と感じる項目である。最も多く出されたのは、第1に「道路事情」に関する項目であり、第2に「情報過疎」、第3に「自然動物園（野生鳥獣被害）」であった。

第1の「道路事情」の中には、「道が狭い」、「車がすれ違いできるだけ道路幅がほしい」、「安全な道をつくって」といったハード面がまず出されている。同時に「車がないと移動できない、何もできない」、「今は自分として車に乗れますが、乗れなかった時交通の便が悪い」といったソフトに関わる面があらわれている。この後者にかかわる面で、現在は車があり運転ができるので当面は対応ができるが、5年、10年後に運転ができなくなった時にどうなるのかという不安があらわれているといえる。なお、集まるのに移動が大変という趣旨の意見も出ており、高齢化集落でこれからの集落のあり方を主体的に考えていくための移動手段と参加の場の確保という点から、これは、重要な検討課題としてあげておく必要がある。

次に比較的図の上の方にまとめられ、課題となっているのが「こまったな・・・」である。これは「仕事がない」、「会社がありません」、「後継者がいない」という点である。しかし同時に仕事の内容、意味を考えている点も見逃せない。それは「生きがいとなる仕事がない」という意見である。会社が無く、後継者が流出しているということと並んで、ここに住んである程度歳をとっても、生きがいとしてやれることを求めている姿も読み取ることができる。会社がない、仕事がないと嘆く側面に注目が集まるが、現にそこに住む人の生きがいとしての仕事は何か。必ずしも経済面だけでなく社会的意義のある仕事をこの地域で作りだすことはできないのかと読むこともできる。

ついで「不便で～す」として、「買い物をする店がありません」、「買い物場所が遠いので大変です」も大きな課題となっている。

「多雨の時土砂災害が心配」との意見があり、これは住民の生活の危険性であるとともに、農山村の持つ多面的機能の評価という点から、市民全体で考えるべき課題である。「雪が多い」、「空き家が多くなってきている」という意見は高齢化集落における生活問題の一つの側面を表している。

第2に多い「情報過疎」は、「携帯が繋がらない」、「携帯電話のアンテナがほしい」という意見であり、今日携帯電話が高齢者にとっても必需品、さらに高齢者の生活を守るための不可欠の機器という点からと、市民が平等に情報を受発信できるという観点から早急に改善を検討すべき課題である。なお、携帯電話とインターネット環境の改善は、仮に高齢化集落の再生のために「二地域居住」や青壮年のUターンを目指すのであれば、不可欠の、他地域との競争的課題である（情報化とその改善がないとこの点での地域間競争で不利になる危険性がある）。もう一点ここでは「防災無線のスピーカーが聞きづらい」、「防災スピーカーは聞き取れなくて意味がない」との意見がでている。高齢者や高齢化集落を支えるための防災スピーカーを市として設置している点は評価されているが、その実効性の点検が必要になっているといえる。

第3の「自然動物園」は、野生鳥獣による被害に関するものであるが、ちょっと遊び心でこのような題名でくくってある。参加者のユーモアのあらわれといえる。これは三つのあらわれ方をしている。一つ目は「イノシシ、シカ、クマが出る」、「サル、クマとかシカが多すぎて困る」という野生鳥獣の出没に関するものである。二つ目は

「野生動物によって畑が荒らされる」、「サル、シカ等が出て農作物が荒らされる。野菜ができない」、「森林（スギ、ヒノキ）が荒らされる。主にクマ」といった自家菜園や農林業への被害である。三つ目は「クマが家の周りに出てくるのでキケン」といった生活の安全に関わる問題である。この点では足尾北部地区での聞き取り調査で、夜玄関を開けたら大きなシカが目の前にいて怖かったという高齢の女性の意見も出されていた。

この問題は、農作物の被害防止という側面と、生活の安全という側面から早急に検討が必要な課題であるといえる。

図の左側に集められたのは「知恵」、「輪」に関する項目である。

地域の良さを最も感じているのは「自然」である。重要と思う赤いシールが最も多いのは「自然がよい」である。「四季がはっきりしている」、「涼しくてよい」、「景色がよい」に加え、「山菜」としてワラビ、ウド、サンショ、ミョウガなど多数出され、さらに「川がきれい、イワナが釣れます」、「水が良い」と続いている。活用できる潜在的な資源が多いことを示している。

また文化的側面で「お祭りは楽しい♪」も評価されている。「足尾祭りがある」、「足尾祭りには地域で共同参加」、「わたらせ鉄道のイルミネーションの取り付けに協力」など前向きな意見が出されている反面、「行事ができない」、「まつりごとができない」など、「でも大変」との意見が付されている。

地域の良さをどういう点で認識しているのかという点では、図の左下にまとめてある、「人間性がよい」、「仲間意識が強い」、「地域のまとまりがよい」、「コミュニケーションがとれている」など人間的つながりの強さが出され、「60歳になっても若手でうれしい」という高齢化集落ならではの頼もしい意見も出されている。

とはいえ「人手不足」は深刻であり、「何をするにも人が足りない。若い人がいない。いつもメンバーが決まっている」、「高齢。人が少なく物事をするのに困難」、「老人ばかりで何もできない」との意見が多く出され、それによって「わざわざ集まるのが困難」、「地域の協同体（テレビ組合、水道組合など）の維持ができない」状態に陥りかけている面も見られ、「みんなで輪になってやるのがない。葬式ぐらい」という意見も出されている。

そこから「一生懸命やっているが人手が少なく、いつも特定の人がやることになってしまう」状態になっている。ここをどうとらえ、人間性の良さ、仲間意識の強さを生かした、集まる場、参加の場の再構築が当地域の課題となっていることが明らかになってきている。

なお足尾地域でのワークショップは足尾南部地区で行ったため、足尾北部地区のかかえる旧鉱業の残した問題点やその産業遺産としての価値などについての意見は出されていない。これはまた別途検討すべき課題であるが、ここでは割愛する。

三依地区（9月18日）P33

ここでの参加者は男性4名、女性4名であり、内3名は三依中学の3年生（3年生は3人で全員である。男性1名、女性2名）であった。中学生の参加は、ワークショップの話をしたところ積極的に参加していただいた。

三依地区のワークショップの結果の図は一見してすぐわかるように、大変華やかである。ここに書かれている絵は、まず参加メンバーである中学生が図の中に書き始め、それならばということで大人達も加わり、その合作としてできあがったものである。

この図も右側が「困難」、「重荷」であり、左側が「知恵」、「輪」に関するものである。

まず右側の「困難」、「重荷」から見ていこう。

右上の赤十字マークのところには病院に関する項目をまとめてある。「急病の時病院が遠い」、「病院が遠い」、「すぐ近くに病院がない為通院の日は誰かが送迎をしなくてはいけない」との意見が出され、病院の距離と移送手段の問題が出されている。また同じような問題として、買い物かごの絵でまとめられた、「買物の場所が遠い」、「お店が少なすぎてちょっとした買い物ができない」、「買い物（何か1つでも買い忘れると、また時間をかけて行かなければ・・・）」も店、商店との距離が問題として指摘されている。

雪の問題も出されている。まず「冬の時期の雪かき」、「冬に雪がたくさん降るからその除雪」という除雪問題、ついで「生活費が高い（冬の暖房費、除雪の費用）」、「雪が降ると運転ができないので不便です」といった雪を原因とする生活問題、さらに「文化財の維持が大変である」、「暮らしてゆくのに先行きが心配」といった地域で暮らす精神的支えに関する点の弱まりの危険性が指摘されている。

交通問題に関しては、「交通機関は電車だけ。駅が遠すぎる」、「男鹿高原駅までの道が、奥まっけていて怖いので、明るくする等の対策が必要」、「交通機関が少ない（定期バスがない）」といった公共交通機関に関する問題と、「自宅から職場までの間に大雨が降ると通行止めになってしまう道路があり困りました」、「運転ができるうちはいいが、老いてくると買物に行けなくなるかも」といった道路や高齢化に伴う自動車運転に関する問題が出されている。特に今はなんとかなるがさらに歳をとったらどうなるかという不安は、住民共通のものとしてよいであろう。

高齢化にともなう問題については、自動車運転用の「紅葉マーク」でくくってあるが、「若い人が少ない、60歳以下は4人」といったある集落の現状が出されており、それに伴って「老人が多くなり畑が荒れてきた」、「田畑が荒れてそばが作れない」といった土地利用の空洞化を指摘する声が出されている。さらに重要な点として「高齢者の楽しむ場所が少ない」といったたまり場の少なさを指摘する声も出ている。

子供に関しては、「子供が少なく学校の統廃合の話が出ている」ことへの不安や、「子供が少なく部活動も限られている」との指摘もある。しかしこの点では図の下の方を左側へ向かって線で結ばれており、また別の側面も読み取ることができる（後述）。

野生動物に関しては、「野生動物に出会える」という自然環境を指摘する意見もあるが、多くは「作物を作ってもサル、鹿、熊のエサになってしまう」、「作物を熊、サル、シカ等に食べ荒らされてすご〜く困っている」という野生鳥獣被害を訴える声が非常に多い。

左側の「知恵」、「輪」では、まず「豊かな大自然」に対する様々な指摘がなされている。「紅葉がきれい」、「山の緑、川や空気がきれいであること」、「自然がすばらしい」、「川で泳ぐことができる」、「サンショウウオが生息している」など都会では決して味わえない自然の豊かさがあげられている。そしてそこから「やるぞ→」となり、「自然が豊かだが活用されていない」ことに気づき、「カヌーツーリング」、「ラフティング」、「水上トレッキング」とアイデアが出され、「地区内の山開き」や地域にある「ファミリースキー場に芝桜を植えてみては」とアイデアが展開していく。

さらにきのこの絵の中に「三依の山菜、きのこはおいしい」と書かれ、「そばの郷づくり、みよりそば街道を宣伝したい、そばがうまい!」、「わさび、川魚がおいしい」と食の豊かさを指摘する意見が出され、また「使わなくなった畑に毎年コスモスの種をまいて、花を咲かせ、道行く人を楽しませています」という実際に活動している内容の紹介もなされている。そこでこうした条件を背景に、「三依地区全体でのイベントをやりたい!」との声が出されてくる。

とはいえ「しかし」、「横川の行事でピーフピアを開催していたが、高齢化のため、一人ひとりの役割分担が増え、続けていくのが難しくなった」、「山菜、きのこ等が地元の人ではなく外来の人に採られてしまう」という現実があり、「(若い) 人がいないので地域の役割が多くなっている(負担)」、「人数不足のため行事が少なくなっている」という困難な側面も指摘されている。

だが地域は「あったかあい人柄」・・・「地域の人がみんな優しい」、「人数が少なくてもあいさつする元気の良さ、心遣いのできる優しさ、助けあい、明るくいられる居場所」、「だれにあいさつしても必ず返事がかえってくる」雰囲気には満ちあふれている。また「学校の子どもが素直である」、「学校の人数が少ないので、みんなと友達になれるし、授業もわかるまで教えてもらえる」利点もある。さらに図の右側の下と線で結んだところには「小中学校の運動会に地域の方、お年寄り、園児などが参加してみんなで楽しめるのは続けてほしい」と要望され、小さな地区であるからできる、様々な世代との暖かい交流がなされている姿を見ることができる。

また「守り続けたい伝統文化」も「獅子舞や返し音頭、一里塚などの文化財がある」、「お祭りを続けたい、八幡宮例大祭」、「十王堂に仏座像がある(モクジキショウニン)」のように数多く、これらの継承も「三依獅子舞を保育園児から地域の方に指導を受けて踊っている」、「お盆の15日には里帰りした方たちと共に盆踊りを楽しんでいる」というように行われている。こうした資源も自然資源や温かい人柄と合わせて、地域を元気にしていく基礎として考え、地域活性化の芽を探っていく必要がある。

次いで重要であるとして、参加者が赤いシールをはったところに注目すると、「限定キャラクターをつくる」、「みより姫のキャラクターをもっと売りたい」、「そば焼酎

（みより姫のキャラクター）製品を売る」といった、地域の伝説を生かして作成したみより姫のキャラクターを生かすべきとの意見に賛同が多い（図の中のみより姫の絵は上三依きすげの郷で運営されている三依そば街道振興会のホームページからお借りしたものである）。地域の限定キャラクターをつくるということは、地域を見つめ直すことから始まるのであり、自分の住む地域をきちんと見つめることで地域のかかえる課題や地域の良さもわかってくるのであり、こうしたカードが出てくると、それに沢山赤いシールが貼られたことの重要な意義を見つめる必要がある。

もう一つ赤いシールが多いカードは、「下野新聞の限界集落で三依を宣伝しているので利用しない手はない」というものである。地元の下野新聞で、平成19年（2007年）初頭から連載が始まった「ふるさとの肖像 日光・三依 限界集落は今」という特集記事で三依地区が紹介されており（1月7日～12月19日）、この宣伝効果をもっと生かすべきだという考えである。このカードの周りには花火のような華やかな色が付けられていた。外から注目されているということをチャンスとして、今、内から地域を見つめていく大変よい機会であるということを地域住民も市も認識する必要がある。

総じて三依地区におけるワークショップの結果からは、若い世代の参加もあって、困難な課題が多い中でも、新しい明るい芽を探っていこうとする積極的な提案がなされているということを読み取ることができる。

栗山地域（9月21日）P34

ここでの参加者は10名で、60歳を越えた男性が多く、女性の参加者は2名であった。

ここでも原則として「困難」、「重荷」は図の右側へ、「知恵」、「輪」は左側に集めたが、ワークショップの時間がやや短かったため、項目がやや未整理で少し混在している。なおここでの図中の絵は支援、アシスタントとして参加した学生が、参加者のお話をうかがいながら描いていったものが多い。

まず右側の「困難」、「重荷」に関する項目から見ていこう。

最も課題となっているのは「働く場所」であり、「村では働く場所がない」、「若い人が外に出て戻ってこない」、「仕事がないから若者が帰ってこない」ということを出発点として、「若い人が少なくなっている」ため、「年々高齢者が多くなるので大変に困る」、「年々年をとっていくので、（体の）動きが鈍くなって困る事」へと推移していく。さらにここでは「高等学校が遠いので家より通うことができないので困る」というように、中学卒業時に地域から出て行かざるを得ないという通学に関わる困難さが重くのしかかっている。

「交通」に関わる問題点では、「道が狭くて交通が不便」、「黒部西川線が狭く電灯がない」といった道路整備に関わるハード面、「バスが通ってない」、「定期バスがない（診療所行きバス、スクールバス以外がない）」という交通機関の運行に関わるソフ

ト面、それと連動して「お店が遠くて買い物が大変」、「診療所では不安」という意見へ繋がっていく。「車がないと生活できない」実態だが、それも「自分が運転できなくなった後に不安がある」といった交通問題を契機とする将来の生活不安があらわれている。

大きな問題となっているのは、サルを中心とした野生鳥獣被害である。「さるが出て農作物に被害が大きくて困っています」、「ソバはサルやハトにやられる」、「クマがでて牛舎を荒らした」などという意見が多数出されている。同時に地区では金網などで畑を囲って守っているがさらに「電気柵をもう一度見直す」という意見や、「いちごの苗はサルは食べない」ことからそこに注目する意見も出ている。しかし食べはしないが「鹿が出ていちごを踏みつぶして困っています」という別の課題も提起されている。

携帯電話が圏外である点については、赤いシールが沢山つけられており、足尾地域のところで指摘したことと同じ課題を抱えているといえよう。

もう一点「困難」なこととしてあげられているのは「冬」の寒さや雪の問題である（図では左側に描かれているが）。土呂部地区は栃木県内でも冬季に最も気温が下がるところであり、「冬場の最低気温の常連」、「雪が降って困る」、「除雪が大変」との意見が多数出されている。

「知恵」や「輪」についてであるが、文化、自然、産業（農業、観光）に関する意見が同じ程度のバランスで出されているところにこの地区の特徴が見られる。

まず文化面であるが、「獅子舞が楽しい」、「一年の中でお祭りが楽しみ」、「お祭りの獅子舞の歌などを指導しています」という意見が出され、さらに季節の行事として、「1月3日の初顔合わせ」、「1月1日～3日男の人が神棚にごふをあげる」「二十日正月、ちからわらび（わらびの煮物）、そば、煮物」、「おひまちが楽しい」、「節分（いわし、豆）」、「10月20日えびすこ、一升枀にお金を入れて神棚にあげる（御神酒、御膳）」など非常に多くがあげられ、「伝統を守っていきたい」という意向が強い。しかし「伝統文化の跡継ぎがいない」、「5日間やっていた祭りが3日間に減ってしまった」、「祭りの活気がなくなっている」、「恵比須講は各家庭でやる、全体ではやらない」というように、高齢化、若者流出の影響が次第にあらわれつつある。

とはいえ人と人のつながりが無くなったのではなく、「言い継ぎが残っている」という意見のように、地区内の連絡を直接会って伝えていく、伝言していくというルールも維持されている。これは地区の絆として注目しておく必要がある。

「自然」に関しては、「ミズバショウがきれい」の評価が高い。これはかつてこの地区がミズバショウを活用した地域づくりを行ったことの反映であると思われる。

「自然がすばらしい」、「土呂部の良い点。星空、秋の紅葉が良い点」、「夏は風が涼しくて生活にしのぎやすいです」となり、厳しい冬もその寒さ故に「ダイヤモンドダストが見られます」という北海道のような新鮮な視点からの意見も出されている。

産業について土呂部地区では他地区よりも農業に関することが多く出されている。まず地域特性から、「イチゴの苗を育てるのに適している」、「いちごの苗を育てて大

きくなったら市街に出荷する」、「いちごの苗取りを共同でやっていますが、色々話が出てやりがいがあります」、「農作業の分業で効率をはかる」というように、夏場涼しい土呂部地区へイチゴの苗の山あげを行い、冬場下へおろすという対応を行っている。イチゴ苗は、先述のようにサルが食べない（シカが踏み荒らすという点はあるが）ため、その育成は作物選択の地域の知恵があらわれているといえる。同様に気候条件をいかしたものでは「寒暖差があり農作物が甘い（トウモロコシ、白菜）」、「直売所で野菜を売れたらいいな」というように、大きくはないが小さな経済的向上を望む声も出ている。これをどう育てていくかが課題であろう。

土呂部地区のワークショップには和牛改良組合に加わっている熱心な方がおられたため、和牛に関する意見が沢山出された。「昭和43年から和牛繁殖をはじめた」、「人工授精の施設を5年前に作った」が、「血統のいい牛でないと安定しない」、「和牛の後継者がいない」、「牛の冬場の敷きわらを刈り集めていますが、年々年をとって体が疲れます」という状態で、拡大という方向はなかなか見いだしがたい状況にある。

「観光」では、地元「キャンプインドロブックルがある」（バンガロー、キャンプ場）、「つりぼりがあって他の地区から人がくる」、「大滝への遊歩道の整備（看板も）」等が出されている。

このように土呂部地区は、働く場所、交通、通信、野生鳥獣被害など解決すべき課題も多いが、すばらしい自然、それを生かした野外施設（キャンプ場など）、イチゴ苗や畜産、養魚など、小さいが農村の資源を活かした多様な展開があり、その結合による発展的な方向の芽をどう探っていくかが検討課題となっているといえよう。最近の言葉を使えば「半農半X」的な対応（綾部市の塩見直紀氏の造語、半農の農は持続可能で健康的な小さな暮らし、半XのXは社会的使命を持った様々な仕事、天職）が可能な地区ともいえよう。

（3）評価

以上三地区のワークショップ結果について見てきたが、ここでは共通する課題について見ていこう。

まず「知恵」、「輪」に関わる、地域の持っている良いところであるが、三地区とも共通しているのは、自然、祭り・文化、人柄の良さである。しかし各地区の意見を見ると、その良さ、強みを積極的に生かしていこうとする姿勢が、三依地区で一部見られるが、他地区では少し弱いように思われる。

そこでいわゆるSWOT分析的な考え方で、地域の内部環境（例えば地域資源のあり方）に関わる強み（Strengths）と弱み（Weaknesses）、外部環境（例えば交流のための条件、競争環境など）に関わる機会（Opportunities）と脅威（Threats）をきちんと分析していく必要があるだろう。ただし高齢化集落においていきなりそれを要求するのは困難であるから、行政を中心として様々な連携体制・組織を検討する必要があるだろう。

次いで「困難」、「重荷」に関わる点であるが、共通して大きな問題となっている野生鳥獣被害、交通問題、人手不足、情報過疎の順に検討を行っていく。

まず第1は野生鳥獣被害についてであるが、これは三地区とも共通する問題であるが、あらわれ方が少し異なっているように思われる。足尾地区、三依地区で被害が報告されているが、その対応策があまり出されていない。他方土呂部地区ではサルが食べないということでイチゴ苗の選択を行っている。また現地を見ると野生鳥獣への防御態勢（柵、檻など）が一番しっかりしているように見受けられる。これはワークショップの対象とした三地区の中では、土呂部地区が農業のウエイトがやや高いから、被害を必死で避けようとしていることの反映であると思われるが、ただ野生鳥獣被害を嘆くだけではなく、どこまでやってどこまで防げたのか、その上で何が困難なのかという点の検討が不可欠である。

なお先進地事例として調査した京都府綾部市の「水源の里」では、野生鳥獣に食べられない作物の検討を進め、現在フキを選択し、フキが食べられるようになった時に備えて次にサンショの検討を進めている。また最近の全国的な野生鳥獣による農作物被害額をまとめた報道では、全国一位は北海道であるが、最下位（被害額が最も少ない）は島根県である。これは県中山間地域研究センターがイノシシを飼育して生態を把握し、防護さく対策に生かしているためとされている（「朝日新聞」2008年1月20日）。過疎、高齢化が最も進む島根県で被害額が他県と比べて少ない点の理由の正確な検証が必要である。地域の知恵（とくに高齢者の知恵と経験を活かす）と行政の支援がこの問題の解決の鍵を握っていると思われる。

第2は交通問題に関することである。これは通院、買い物、通学など生活のすべてに関わる問題である（交通体系のあり方については日光市として別途検討を行っているのでその結果にゆだねたい）。

ただこの件では、今は車の運転ができるので対応ができるのでなんとかなるが、5年10年後が心配という声が圧倒的である。そして移動手段が乏しくなると集まりにくくなり、「参加の場」を作りにくくなる。「参加の場」があることが地域での生きがい、幸福感と密接な関係にあることは第4章で述べてあるが、それゆえこの交通問題は、誰の、いつどこへの移動かという点の検討と、病院、店に加えて高齢者のたまり場をどう作っていくのかということの検討とが同時になされる必要があるであろう。参加の場、意見交換のためのたまり場づくりという点では、沖縄県や宮城県丸森町の「共同店」の経験も参考になるであろう。

第3は人手不足の問題である。各地でお祭りや行事の維持が困難になりつつあるとの意見が出されているが、この点では、地区の壁を取り払ったお祭りや行事のあり方の検討により、良い意味での「省力化」が不可欠であろう。さらにそれに加えて何らかの形で他地域からの新規参入の追求であろう。「二地域居住」やUターンへの検討は、それがすべてではないが、一つの手段として検討すべき点であろう。その点では愛媛県久万高原町で行われている農業研修センターの活動などは注目に値する実践であるといえよう。ただその際の必要条件が次の情報過疎への対応である。

第3章 高齢化集落における集落機能の実態等に関する調査
V. ワークショップの結果について

第4は情報過疎である。足尾地区、土呂部地区で非常に強い要望として出されているのが、携帯電話の不通の解消である。これは単に電話がかけられるということだけではなく、情報が入手できることが、新規参入者への呼びかけの前提であるし、第4章でふれているように、地域に遊びに来る人の安全性の確保という点からも不可欠の条件といえよう。無論この課題は、一つの地域のみで対応可能な課題ではないが、市として重点を定めて、通信会社等と交渉すべき課題であるといえよう。

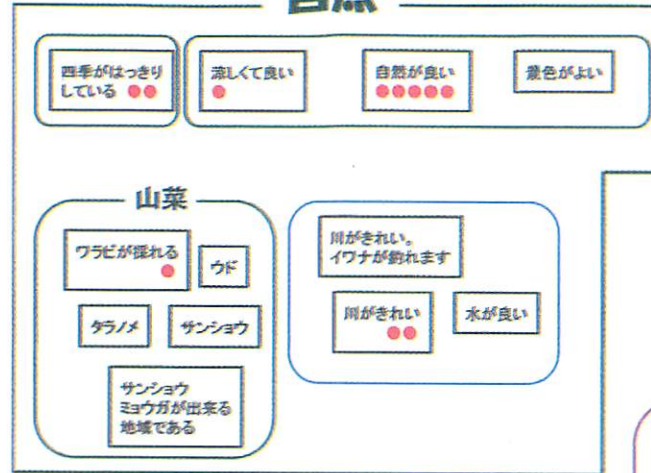
最後に三地区の今後の課題として、一人ひとりが地域の良さをしっかりと見つめ、地域の課題を掘り下げて考えることが大切になっている。「足元を掘れ、そこに泉がわく」という言葉もあるが、もう一度地域の点検作業を行う必要がある。

また市も今回職員が地域に入るという積極的な対応を行ってきたが、まだ市の全庁的な共通認識が形成されているとはいえない状態である。綾部市が行ったように、市全体として高齢化集落を見捨てない、見つめ続ける、見守る、支援するという姿勢が今まさに大切になっているといえよう。

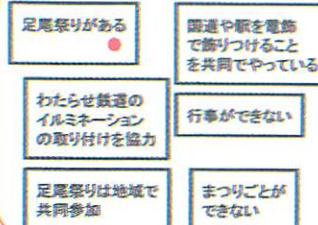
（宇都宮大学農学部農業経済学科 守友 裕一）

足尾南部4自治会

自然

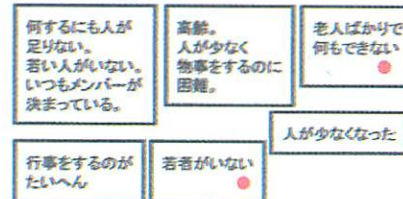


お祭りは楽しいな

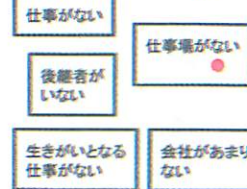


でも大変

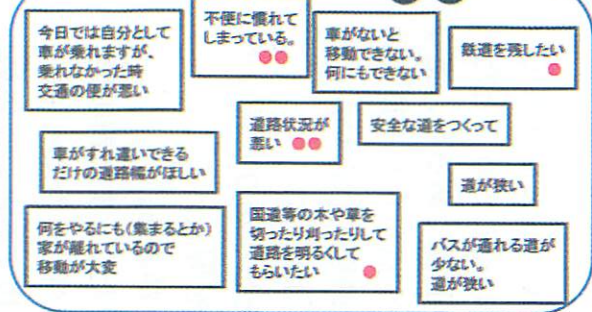
人手不足



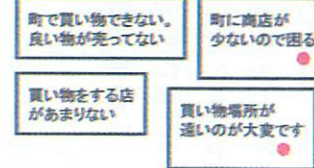
困ったな..



道路事情



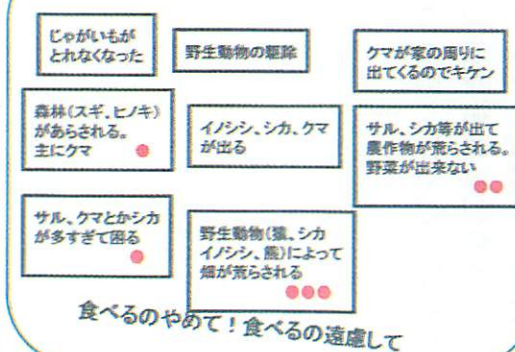
不便でーす。



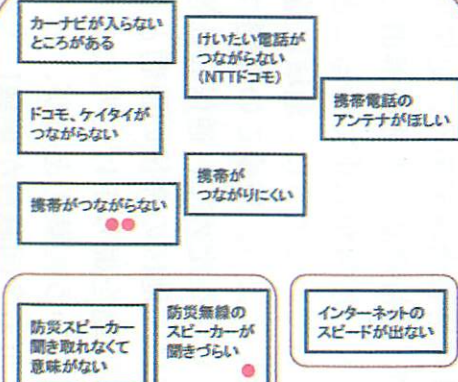
困ったな...

お金がない ●●●●●●●●●●

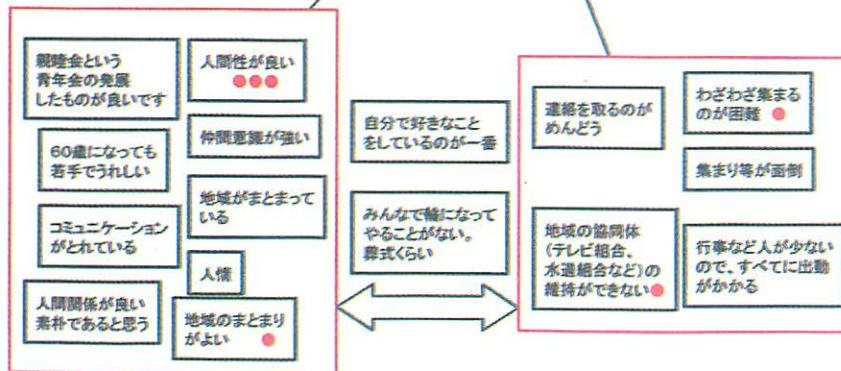
自然動物園

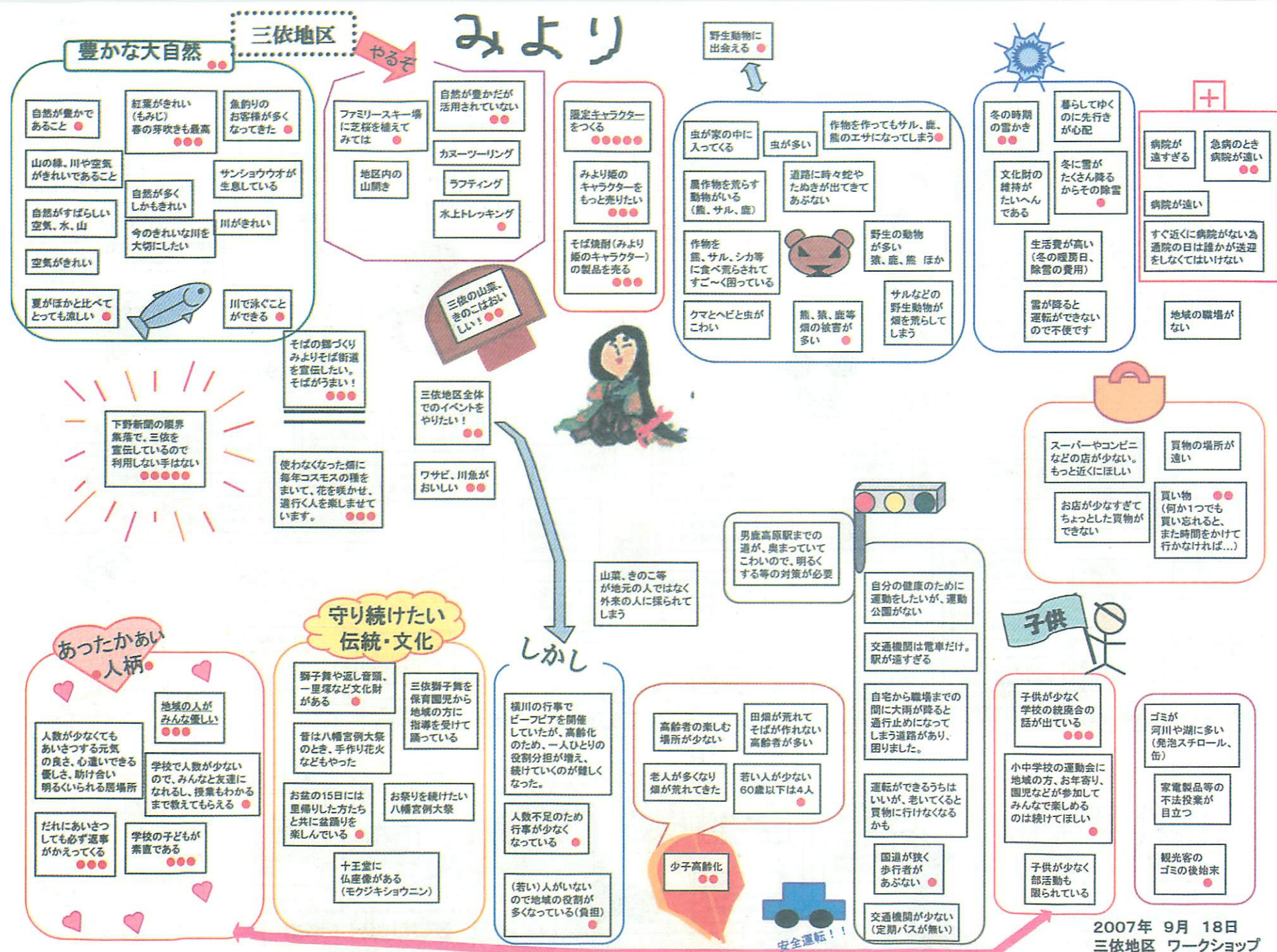


情報過疎



一生懸命やっているが
人手が少なく、いつも
特定の人がやることにな
ってしまう





栗山土呂部自治会

獅子舞

獅子舞が楽しい ●
一年のなかでお祭りが楽しみ ●
お祭りの獅子舞の歌などを指導しています ●
5日間やっていた祭りが3日間に減ってしまった ●
伝統文化の後継者がいない ● ● ● ● ●
祭りの活気がなくなっている ●

節分 (いわし、豆)

1月3日 初顔合わせ ● ● ● ● ●

二十日正月
・ちからわらび (わらびの煮物)
・そば
・煮物

10月20日
「えびすこ」
一升餅にお金を入れて
神棚にあげる
(御神酒、御膳)

季節の行事がたくさんある

おひまが楽しい

1月1日～3日
男の人が神棚に
ごふをあげる。
(昔は男の人が
ご飯を炊いた)

恵比寿講は
各家庭でやる。
全体ではやらない

冬

除雪が大変! ●
道が凍ってしまう ●
雪かきが大変です。いちご作りで大変忙しくて大変です ●
雪が降って困る ● ● ● ● ●
冬の寒さに ●
冬場の最低気温記録の常連 ●
軽油が凍るほど寒かった ●
雪が降ると牛のエサやりが大変 ●
冬場 雪が多く降るので困る ●
雪が多くて除雪が大変だ ● ● ● ● ●
冬はマイナス15℃くらいになって寒い ●

利点

ダイヤモンドダストが見られます ● ● ● ● ●

夏

夏の朝晩は涼しい ●

夏は風が涼しくて生活にのびやすいです ● ● ● ● ●

自然

大自然 ●
自然がすばらしい ●
土呂部の良い点。星空、秋の紅葉が良い点。 ● ● ● ● ●
紅葉が美しい (10月半ば見ごろ) ● ● ● ● ●
紅葉がきれい ● ● ● ● ●
ミズバショウがきれい ● ● ● ● ●

観光

ゲートボール、グランドゴルフ、輪投げなどをやる

キャンプ、ドロブツクルがある ● ● ● ● ●

つりぼりがある他の地区から人がくる ●

大滝への遊歩道の整備 (看板も) ●

山菜を採りに外から人が来てくれる。部落で採る分が... ●

山菜、きのこが採れる ●

山菜が自慢 (ワラビ) ●

山菜が美味しい ●

イチゴの苗を育てるのに通じている

いちごの苗を育てて大きくなったら市街に出荷する

寒暖差があり農作物が甘い (トウモロコシ、白菜)

農作物の分業で効率をはかる

直売所で野菜を売りたい

いちごの苗取りを共同でやっていますが色々話が出てやりがいがあります

圏外

ケータイがつながらない

無線がないから携帯電話が使えない

携帯電話が使えなくて大変困ってます... ● ● ● ● ●

仕事がないから若者が帰ってこない ● ● ● ● ●
若い人の仕事がない ● ● ● ● ●

村では働く場所がない

仕事がない ● ● ● ● ●

若い人が外に出て戻ってこない ● ● ● ● ●

働く場所

今は若者が少ないので昔からの祭りができない。獅子舞が大変少なくなりました ● ● ● ● ●

人手がない ● ● ● ● ●

若い人が少なくなっている ● ● ● ● ●

獅子舞をやる人が少なくなっている ● ● ● ● ●

若い人が少なくなっている ● ● ● ● ●

年々年をとっていくので、(体の)動きが鈍くなって困る ● ● ● ● ●

高等学校が遠いので家より通うことができないので困る ● ● ● ● ●

年々高齢者が多くなるので大変に困る ● ● ● ● ●

小中学生がもう5人しかいない ● ● ● ● ●

診療所では不安 ● ● ● ● ●

自分で運転できなくなった後に不安がある ● ● ● ● ●

子供が少なくなっている ● ● ● ● ●

お店が遠くて買物が大変 ● ● ● ● ●

買物に行くことに大変。若い人がいなく、年寄りが多くなり、大変な事が多くなる ● ● ● ● ●

道が狭くて交通が不便 ● ● ● ● ●

交通

黒部西川線が狭く、電灯がない ● ● ● ● ●

バスが通っていない ● ● ● ● ●

定期バスがない (診療所行き/バススクールバス以外がない) ● ● ● ● ●

車がないと生活できない ● ● ● ● ●

車がいないと大変 ● ● ● ● ●

サルが出て困る ● ● ● ● ●

サルが群れて来る ● ● ● ● ●

サルが出て農作物に被害が大きくなって困っています ● ● ● ● ●

猿が作物を食べてしまう ● ● ● ● ●

鹿が出ていちごを踏みつぶして困っています ● ● ● ● ●

ハトがそばを食べてしまう ● ● ● ● ●

シカが出て困る ● ● ● ● ●

年々サル、シカ、クマが出てきて農作物を荒らして困る ● ● ● ● ●

青首大根を食われて困っています ● ● ● ● ●

電気柵をもう一度見直す ● ● ● ● ●

クマが出て牛舎を荒らした ● ● ● ● ●

いちごの苗はサルは食べない ● ● ● ● ●

和牛の集牧を交代でやっている (A班・B班) ● ● ● ● ●

矢板の畜産市場ではパートが入ったため出荷以降の手間が少なくなった ● ● ● ● ●

矢板の市場まで農協の車で和牛を出荷 ● ● ● ● ●

牛の冬場の敷きわらを刈り集めています年々年をとって体が疲れます ● ● ● ● ●

和牛農家の後継者がいない ● ● ● ● ●

人工受精の施設を5年前に作った ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●

和牛農家は昭和50年代に15軒くらい現在半分くらいに ● ● ● ● ●

昭和43年から和牛繁殖を始めた ● ● ● ● ●

牛を飼っていますが人工受精で大変困っています ● ● ● ● ●